

野洲市資料提供

取扱い注意		
解禁日	テレビ ラジオ	6月4日午後5時以降
	新聞	6月5日朝刊から
提供年月日		令和8年5月26日
担当部課		教育委員会文化財保護課
担当者		福永
連絡先電話番号		(077)589-6436

中畑・古里遺跡発掘調査現地説明会について

—^{ほったてばしらたてもの}弥生時代の大型掘立柱建物を発見—

野洲市教育委員会では、野洲市妙光寺地先での大型店舗出店計画に先立ち、埋蔵文化財発掘調査を実施しております。当該調査は調査面積が 9,400 m²の広範囲に及ぶため、下記の3調査機関の分担によって実施しています。

この中で、（公財）滋賀県文化財保護協会が担当している調査区にて、弥生時代中期末～後期初頭の大型建物を検出しました。今回の成果を現地にて広く公開するため、下記・別紙のとおり現地説明会を開催しますので資料提供します。

記

1. 遺 跡 名 中畑・古里遺跡
 2. 場 所 野洲市妙光寺地先（字下六反田 299 番地 1 外 78 筆）
 3. 調査期間 令和 7 年 12 月～令和 8 年 7 月（全体）
 4. 調査機関 （公財）滋賀県文化財保護協会
 （公財）元興寺文化財研究所
 野洲市教育委員会
 5. 調査成果 （公財）滋賀県文化財保護協会担当の調査区にて、弥生時代中期末～後期初頭の大型掘立柱建物を検出しました。建物の規模は、梁行 1 間約 7.0m、桁行 5 間約 18.0m、桁行の柱間間隔は約 3.5m で、床面積は約 126 m²を測ります。この建物は祭祀的な特別な性格をもつもので、弥生時代では県内最古かつ最大規模です。弥生時代後期に近江南部で展開していく集落の大型建物の原型に位置付けられます。三上山や大岩山銅鐸との関連も強く示唆されるものです。
 6. 一般向け現地説明会
 令和 8 年 6 月 6 日（土）午後 1 時 30 分～
 7. 報道機関対象の現地での事前説明会
 令和 8 年 6 月 1 日（月）午後 2 時 00 分～（駐車場あり）
- ※一連の説明会での説明・質疑応答は、調査を担当した（公財）滋賀県文化財保護協会が行います。次ページ以降は同協会作成の説明資料です。

資料提供

資料提供日：令和8年(2026年)5月26日(火)14:00

発表日程：令和8年(2026年)6月1日(月)14:00

発表場所：中畑・古里遺跡発掘調査現場・別添地図参照

解禁日：テレビ・ラジオ・インターネット 6月4日(木)17時
新聞 6月5日(金)朝刊

野洲市政記者クラブ 各位

機関：公益財団法人滋賀県文化財保護協会

担当者：調査課 主任 小林 裕季

解禁：有

TEL：077-548-9780

E-mail：chosa@shiga-bunkazai.jp

弥生時代の大型掘立柱建物を発見！

公益財団法人滋賀県文化財保護協会は、令和7年度12月から株式会社カインズ様からの依頼により商業施設開発事業に伴う事前発掘調査を野洲市中畑・古里（なかはた・ふるさと）遺跡において実施しています。

調査の結果、弥生時代中期末～後期初頭の大型掘立柱建物・祭祀土坑・沼沢地、平安時代の掘立柱建物・土坑・溝、鎌倉時代の井戸・溝等が見つかりました。とりわけ弥生時代の大型掘立柱建物は、守山市伊勢遺跡で見つかっている弥生時代後期の大型建物の祖型となるもので、県内では最古かつ最大規模の建物跡となります。

記

(1)遺跡名：中畑・古里（なかはた・ふるさと）遺跡

(2)所在地：野洲市妙光寺地先

(3)調査期間：令和7年(2025年)12月～令和8年(2026年)6月(予定)

(4)調査面積：3,900 m²

(5)調査機関：公益財団法人滋賀県文化財保護協会

①発掘調査担当：調査課 主任 小林 裕季

②連絡先：520-2122 滋賀県大津市瀬田南大萱町 1732-2

TEL：077-548-9780/現場携帯：090-7359-0585(小林)

E-mail：chosa@shiga-bunkazai.jp

(6)調査成果の公開

①現地説明会

開催日時：令和8年(2026年)6月6日(土)13時30分から

開催場所：中畑・古里遺跡発掘調査現場(野洲市妙光寺地先、別添地図参照)

アクセス：JR 琵琶湖線 野洲駅より徒歩約20分

*駐車スペースに限りがありますので、公共交通機関での来場をお願いします。

*動きやすく、汚れてもよい服装をお勧めします。

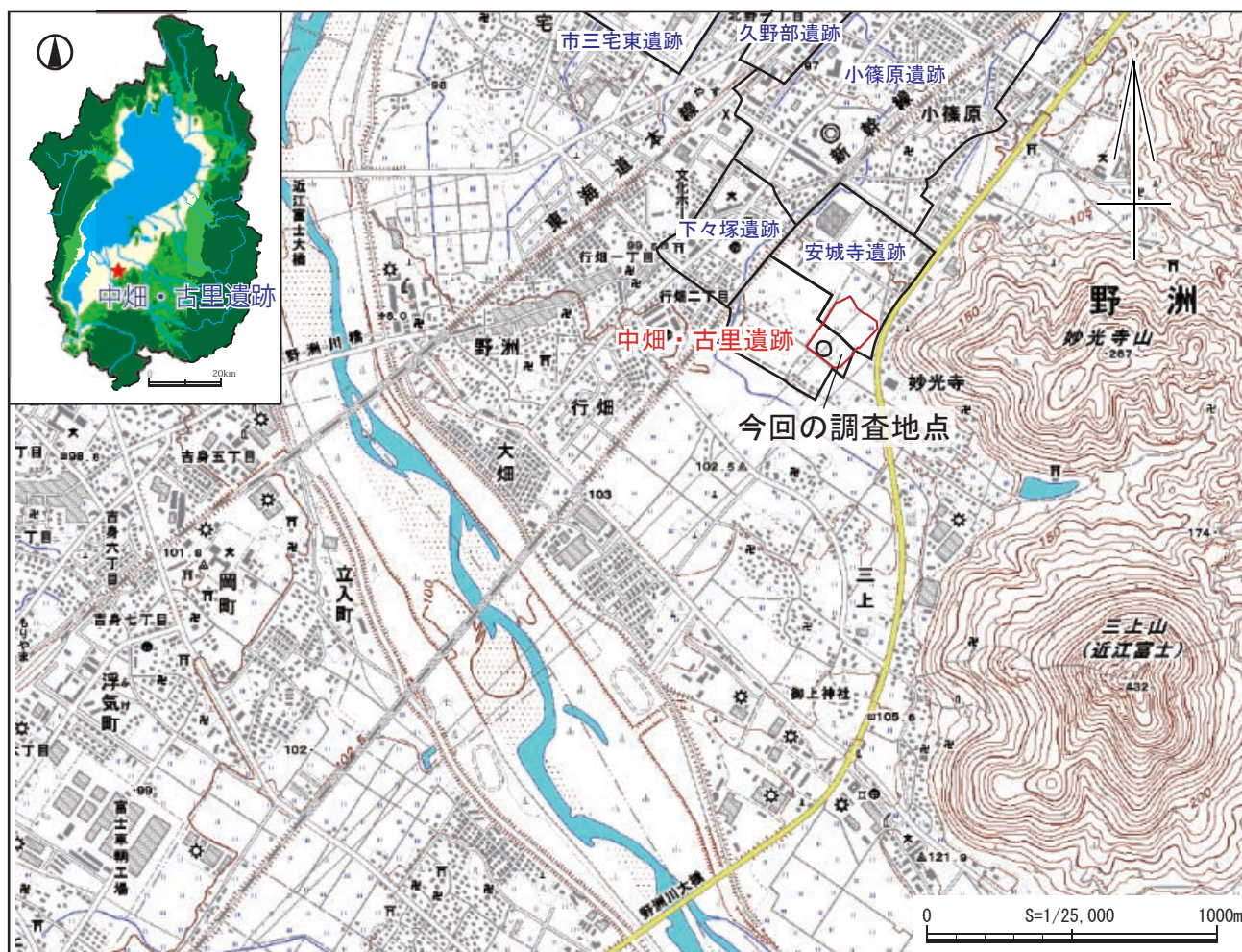


図1 中畑・古里遺跡と周辺の弥生時代の遺跡

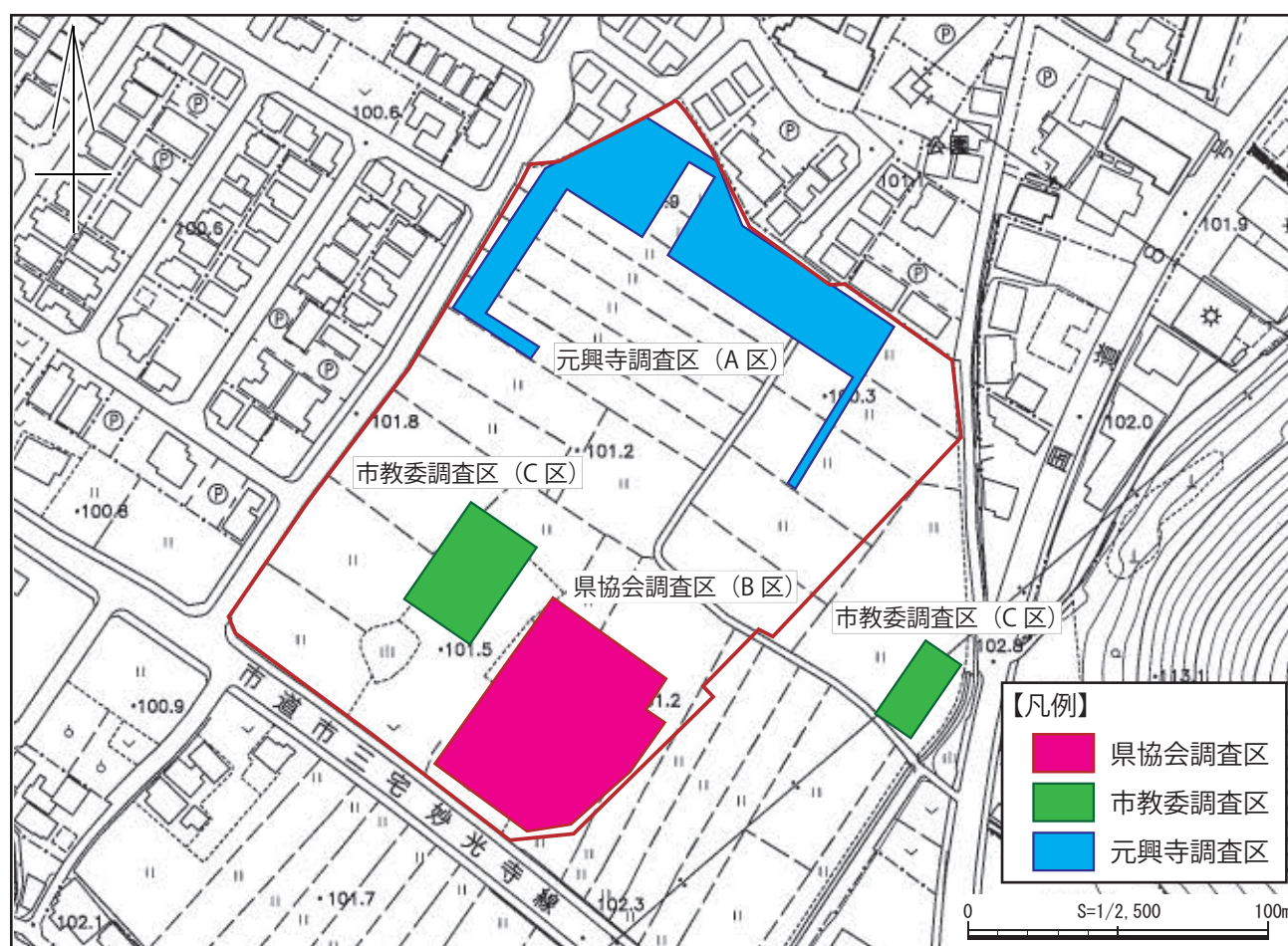


図2 発掘調査対象地と調査区位置図

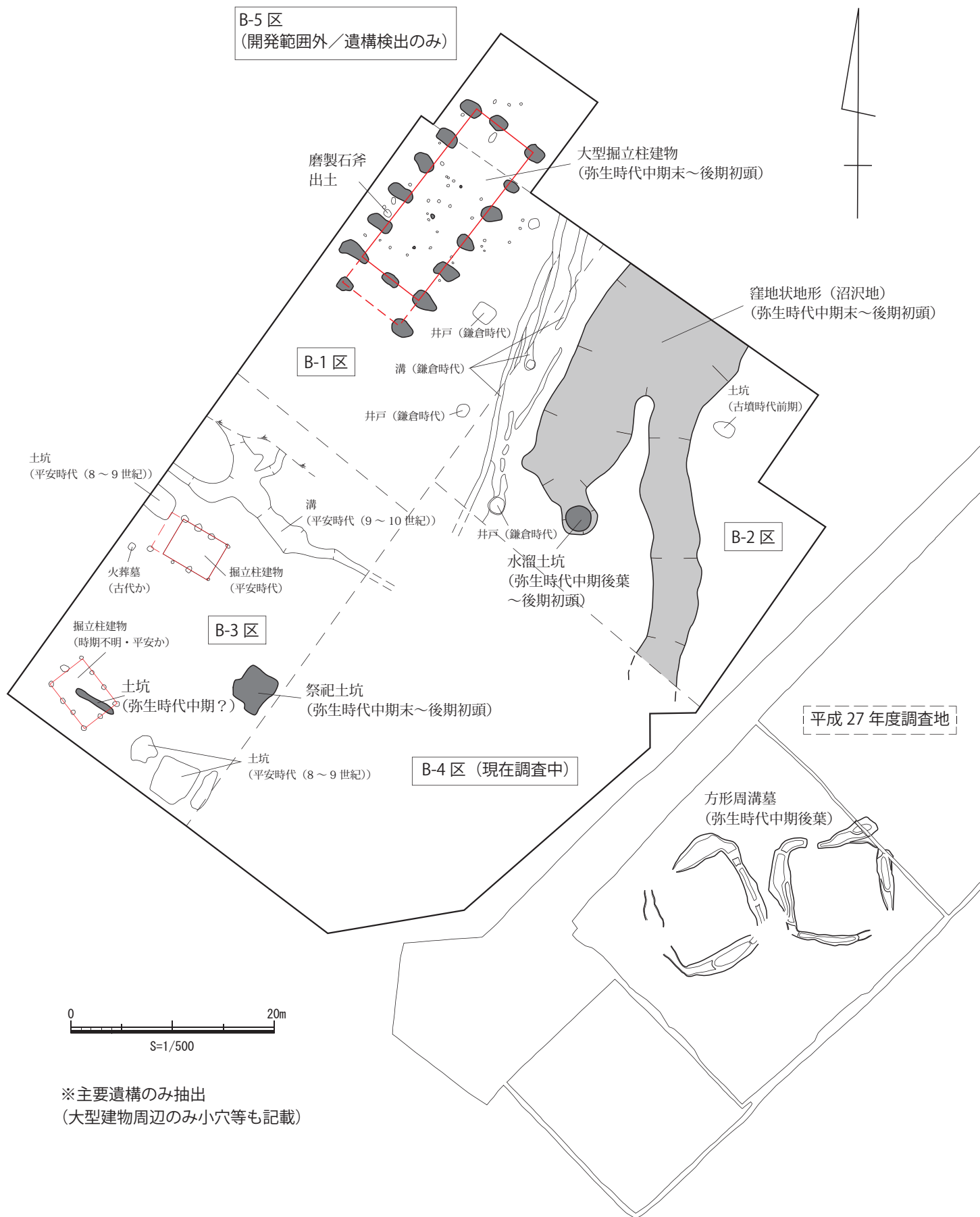


図3 中畑・古里遺跡 B 区 (県協会調査分) 主要遺構配置図



写真1 調査地遠景（北西から）



写真2 大型掘立柱建物 検出状況（南東から）



写真3 大型掘立柱建物遠景（北西から）



写真4 大型掘立柱建物遠景（北西から）



写真5 大型掘立柱建物近景（南東から）

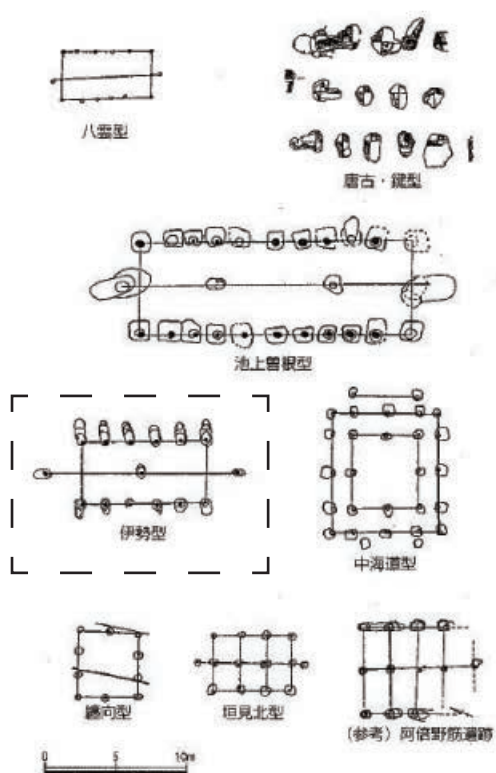


写真6 B-2区 全景（北東から）



写真7 B-3 区 全景（北東から）

【参考：「伊勢型」大型建物】



大型建物のタイプ分類（文献 1 より引用）



伊勢遺跡 SB4



下鉤遺跡大型建物 2

「伊勢型」大型建物例（文献 2 より引用）



斜路を用いた柱立て上げイメージ（文献 3 より引用）

文献 1：『弥生の大型建物とその展開』サンライズ出版（2006）

文献 2：『大型建物から見えてくるもの－弥生時代のまつりと社会－』安土城考古博物館（2009）

文献 3：『守山市誌 考古編』守山市（2005）

中畑・古里遺跡発掘調査概要

1. 遺跡の概要（図1・2）

中畑・古里遺跡は野洲市妙光寺に所在し、弥生時代から中世にかけての集落遺跡として知られています。遺跡は野洲川右岸の三上山や妙光寺山近くの扇状地上に立地しています。

弥生時代に焦点を絞った中畑・古里遺跡での既往の調査成果では、土地区画整理事業および国道8号バイパス建設に伴う調査で、弥生時代中期後葉～後期初頭頃の集落域や墓域の一端が垣間見られる成果が得られています。平成17年度の調査では弥生時代中期後半の円形竪穴建物1棟が、平成18年度の調査では日本海沿岸地域との関連が指摘されている弥生時代中期末～後期初頭頃の多角形住居1棟がそれぞれ見つかっています。また、平成15年度の調査では弥生時代中期後葉の方形周溝墓1基が、今回の調査地の隣接地となる平成27年度の調査では同時期の方形周溝墓2基がそれぞれ見つかっています。

2. 調査の内容（図2・3、写真1）

今回の調査は、株式会社カインズからの依頼により、野洲市教委・当協会・元興寺文化財研究所がそれぞれ調査区を分かち、商業施設開発事業に伴う発掘調査を令和7年度（2025年度）から実施しています。

今回の当協会による調査では、弥生時代中期末～後期初頭の大型掘立柱建物・祭祀土坑・沼沢地、平安時代の掘立柱建物・土坑・溝、鎌倉時代の井戸・溝等が見つかりました。特に弥生時代の大型掘立柱建物（以下、大型建物と呼称）は、守山市伊勢遺跡で見ついている弥生時代後期の大型建物の祖型となるもので、弥生時代の建物に限りますと、県内では最古かつ最大規模の建物となります。

以下に、この弥生時代の大型建物を中心に記述を進めます。

（1）弥生時代の大型建物（図3、写真2～5）

大型建物は、調査区B区（滋賀県文化財保護協会調査区）の北端部で1棟が見つかりました。建物南東の眼前には後述する沼沢地が広がり、微高地縁辺部にあたる地形の傾斜変換点付近に立地しています。柱穴内から出土した土器の特徴によって、弥生時代中期末～後期初頭（紀元前後／約2,000年前）の建物と判断されます。

建物規模と構造

【規模】 掘立柱建物で、平面形態は北東－南西方向に長い長方形を呈します。梁行1間（約7.0m）、桁行5間（約18.0m）、桁行の柱間間隔は約3.5mで、床面積は約126㎡を測ります。

【桁行側柱】 桁行側柱の柱穴の規模は、短軸1.0～1.5m、長軸1.5～2.5mであり、平面楕円形を呈します。柱穴掘方は外側が浅く、内に向かって傾斜あるいは段状になるものが大半で、内側が極端に深くなります。深さは最深部で0.7～0.9m前後となり、柱を立てる際に外側の傾斜部・段を斜路として柱を落とし込み、柱を引き起こしたと想定されます。

【棟持柱】 桁行側柱の柱穴に対して、棟持柱の柱穴はその様相が大きく異なります。掘削をおこなった建物南西端の棟持柱は、短軸約0.5m、長軸約1.8m、深さ約0.45mと側柱よりも小さな規模です。建物の外方には独立した棟持柱の痕跡が確認できないことから、独立棟持柱を持つ構造ではありませんが、具体的な構造については、現時点では不明です。

【南西端で張り出す柱穴】 建物本体からさらに南西には、桁行の延長上に側柱と同等規模の柱穴が認められます（図3の建物点線部分）。当初はこの柱穴までが大型建物の規模と推測していましたが、桁行に柱筋が通るものの柱間間隔は約3.0mとやや短く、棟を支える梁行の中間に柱の痕跡は認められません。このことから、建物の基本構造部分（母屋）は梁行1間×桁行5間（床面積約126㎡）と判断しています。南西面に張り出す柱穴は、庇状となって広縁が付随する構造などが想定されますが、具体的な構造についてはこれからの検討課題の一つと言えます。

【建物の時期】 掘立柱建物の柱穴であるため、出土した土器は多くはありませんが、その特徴から、弥生時代中期末～後期初頭（紀元前後／約 2,000 年前）のものと考えられます。柱穴の重複などが認められないことから、建物は建て直されることなく、1 度きりで建てられています。

（2）大型建物と周辺の景観（図 3、写真 6・7）

今回の調査地付近では、当該期（弥生時代中期末～後期初頭頃）の竪穴建物や掘立柱建物はこれまでに見つかりません。一般居住域からは少し離れた位置に大型建物が単独で立地していたと考えられます。一方で、今回の調査地からは大型建物とほぼ同時期の祭祀的要素の強い不整方形土坑や沼沢地が、平成 27 年度の隣接地における調査では方形周溝墓 2 基が見つかりしています。

【沼沢地】 大型建物から約 15m 南東に広がる窪地状の自然地形です。周辺での調査結果から、付近はこのような小さな谷筋や微高地が複雑に入り組んだ旧地形であったとみられます。

沼沢地は最大幅約 15m、深さは最深部で約 0.6m を測ります。南側で二股に分かれ、西側は入り江状になって最奥に水溜め用と推測される平面正円形の土坑が見つかりしています。東側は幅 4～5m、深さ約 0.3m の溝状になって南に延伸します。堆積土には流水の痕跡を示す砂粒はほとんど見られず、水の流れが少ない湿地状態だったと考えられます。

この沼沢地からは多くの土器が出土していますが、それらが作られた時期は大型建物とほぼ同時期の弥生時代中期末～後期初頭ののものに限られます。出土地点は、大型建物の正面にあたる今回の調査地の北寄りに集中しており、大型建物との関係が示唆されます。出土土器の構成は、大型の壺の比率が高く、甕が極端に少ないなど、その傾向が一般的な集落での甕が多く壺が少ないあり方とは異なります。このことから、出土土器は大型建物で執り行われた祭祀（水辺の祭祀）などの行為に使用された土器類だったと考えられます。また、東部瀬戸内地域や大阪湾岸地域からの影響を受けた土器が含まれており、淀川水系を通じた他地域との交流が窺えます。

【祭祀土坑】 祭祀土坑と考えられる不整方形土坑は、大型建物から約 40m 南西に位置します。規模は一辺 3.2～4.0m、深さ約 0.2m を測ります。出土土器は沼沢地と同様に大型建物の時期と同じで、やはり大型の壺等が多く出土しています。大型建物で執り行われた祭祀に関連する遺構と推測されます。

【方形周溝墓】 平成 27 年度の国道 8 号バイパス建設に伴う東側隣接地での調査において、弥生時代中期後葉の方形周溝墓が 2 基見つかりしています。大型建物から沼沢地を隔てて南東約 70m の地点になります。沼沢地が墓域を画する境界として機能していたとみられます。

なお、これまでの調査成果より、当地周辺では弥生時代中期後葉になると方形周溝墓や竪穴建物などが形成され始めるものの、広範囲に点在する状況であることから、短期間で頻繁に移動を繰り返していた集落（ムラ）だったと考えられています。

【周辺の景観】 改めて立地をみると、妙光寺山の丘陵裾部から約 150m の距離にあり、南東方向に約 1.5 km の位置にある三上山を仰ぎ見るには絶好の立地と言えます。大型建物が三上山を遥拝するためのものであったことは想像に難くありません。

また、北東方向に約 2 km の位置には、合計 24 個の銅鐸が発見された大岩山銅鐸出土地があります。今回の調査では銅鐸は見つかりませんが、大型建物の時期である弥生時代中期末～後期初頭頃は、銅鐸の機能と役割が、小型で鳴らされていた「聞く銅鐸」から、祭祀の場で権力の象徴として大型化・装飾化された「見る銅鐸」へと移り変わる時期に奇しくも重なります。当地の大岩山では、弥生時代中期末以降に銅鐸が制作され、埋納時期は後期末から終末期と考えられており、直接的な物証は得られなかったものの、銅鐸祭祀との関わりも無縁とは思えません。

（3）大型建物の位置づけ

今回みつかった大型建物は、一般的な集落居住域から離れた位置に単独で立地しており、この場所が聖域的な空間であったと推測されます。建物の柱穴内から出土した土器の年代観より、弥生時代中期末～後期初頭に建てられていたと考えられ、規模は梁行 1 間×桁行 5 間、床面積約 126 m² です。1 間×5 間の平面構成や柱掘方に斜路を持つ構造は、森岡秀人氏が提唱した「伊勢型」の構造と一致します（註 1）。

同時期の他地域での大型掘立柱建物は、弥生時代中期の事例に唐古・鍵遺跡（奈良県田原本町）が、同中期後半の事例に池上曾根遺跡（大阪府和泉市・泉大津市）や武庫庄遺跡（兵庫県尼崎市）などがあります。しかし、これらは柱材の直径が0.6～0.9mと太く、梁行・桁行ともに間数および柱穴構造において「伊勢型」と様相が異なるため、「伊勢型」大型建物とは系譜が異なると考えられています。

一方、これまで「伊勢型」大型建物の最古段階の事例とされてきた弥生時代後期中葉の伊勢遺跡の大型建物SB1やSB2は、2間×4間で床面積約88㎡（SB1）、1間×5間で床面積約57㎡（SB2）の規模で、いずれも柱穴掘方に斜路を持つ特徴的な構造を有します。その後、弥生時代後期後半の下鈎遺跡（栗東市）や大藪遺跡（京都市）で見つかっている大型建物に、建物構造の系譜が継承されていくと考えられています。

今回見つかった大型建物は、伊勢遺跡での事例よりも年代的に古く、最古の事例に位置付けられ、かつ、建物規模も最大規模となります。今回の発見は「伊勢型」大型建物の初源・祖型となるもので、当該地域の弥生時代の社会の発展過程を考えるうえで極めて重要な成果となります。加えて、これまで伊勢遺跡で始まると考えられてきた大型建物を伴う集落祭祀の原形が、三上山や大岩山銅鐸との関係が示唆されるこの地で発見されたことも大きな意義を持ちます。

3. まとめ

今回の発掘調査によって得られた成果は、以下のようによまとめることができます。

- ① 今回見つかった大型建物（弥生時代中期末～後期初頭）は、これまで伊勢遺跡が初源と考えられてきた大型建物（弥生時代後期中葉）の前段階にあたる県内最古の事例であり、かつ、建物規模も最大である。「伊勢型」大型建物の祖型と位置づけられる。
- ② 当該期の集落居住域から離れた地点に単独で構築され、微高地縁辺部の水辺付近に立地する。三上山を遥拝し、大岩山銅鐸との関連も示唆される聖域的な祭祀空間であったことが想定される。

註1)「伊勢型」大型建物 … 伊勢遺跡で見つかった弥生時代後期後半のSB4（梁行1間、桁行5間、床面積約40㎡）などを典型とする。その特徴は以下の6点である。①梁行1間、桁行5間の間取りを中心とする。②長方形の平面形を呈し、その規模が梁行4～5m、桁行8～9mを測る。③切妻造りで、両妻に独立棟持柱を有し、時には屋内棟持梁柱が検出される。④高床式の大型建築物である。⑤柱掘方が長く大きく、一方に柱を落とし込むための斜路を造作する。⑥近江南部や山城など、弥生時代後期の近畿地方北部に分布の中心がみられる。

これまで最も早く出現する伊勢遺跡の建物がその初源と考えられてきた。これらのうち①・②は変則があるが、③・④・⑤は必須要件とされている。

【森岡秀人（2006）「大型建物と方形区画の動きからみた近畿の様相」『日本考古学協会二〇〇三年度滋賀大会シンポジウムⅠ 弥生大型建物とその展開』サンライズ出版】

滋賀県野洲市中畑古里遺跡の発掘調査成果、とくに大型建物の評価について

奈良県立橿原考古学研究所特別指導研究員

森岡 秀人

滋賀県文化財保護協会が実施している発掘調査では、特筆すべき所見が数多く得られており、弥生時代の社会の発展過程を考える上に多大な内容が明らかとなった。以下に、その要点を箇条書きする。

●今回発掘された大型建物は、守山市伊勢遺跡で多数確認されて命名された伊勢型であり、その中では最古かつ最大の建物である。その起源、発祥と関わる遺構が従来、三上山と関連付けられる場所のエリアでも最近接する遺跡で発見された意義は大変大きい。

●弥生集落一般の居住域など俗的空間ではなく、生活臭に乏しい聖域的な空間で営まれており、この建物に孤高な立地が窺われる。周辺には、この建物の構築年代とほぼ同時期の弥生中期後葉～後期初頭の祭祀的要素の強い方形土坑や沼沢地が存在しており、聖地的な空間構造の一端を示唆している。

●出土土器には、東瀬戸内から大阪湾岸地域など近畿中心部の影響を受けたものが認められ、関係性を一定保つものの、大型建物には継承性は少なく、各支柱穴に斜路構造を採用した伊勢型の建物を創出した意義が認められる。伊勢型の大型建物は伊勢遺跡を標識として唱えたが、それより先行する公算が高く、初現地、源流が三上山や大岩山銅鐸により近い当遺跡にあったのではないかと推測される。近畿北部が大和や河内・和泉など南部地域に対し、躍動し始める時期に該当し、新しい歴史的ステージに立ったことが如実にわかる物証が姿を現したと見て過言ではない。

●紀元前1世紀後半～紀元1世紀初頭のこの時期は拠点性の高い大集落が次々と衰退し、弥生時代中期の末から後期の初めへの移行を示す激動期である。東アジア世界では新王莽期を挟んで、前漢から後漢へと変化する。この時期を象徴する大型建物の構造が規格化し、中心施設とはまた異なったスタイルで刷新された意味は大きく、そこに近畿の南部と北部の建築様式の転換、祭儀などの違いも反映していよう。

●古代野洲郡、栗太郡のエリアは、近江という地域を考えると、特徴の違いが見られるが、湖南地域発祥の伊勢型大型建物を絆とする緊結性は、その後の展開過程を考えると、新しい観点が加わったと言えるだろう。三上山、大岩山、伊勢遺跡などをグローバルにとらえて、この地域の有機的関係をあらためて考えるにも大きな手掛かりを与える成果である。

●伊勢型の建築物は、基本は梁間1間、桁行4ないし5間、6間規模、3 m前後の大きく細長い柱穴には段状構造を一部とりつつスロープを備える。高床で屋根までの高さも大きい数値が目指されている。もちろん変則性は窺え、京都市大藪遺跡例のような柱間や今回のような縁と庇が想定できる事例なども含み込む。今回の事例も近接棟持柱ととらえて、梁間1間とみる方が弥生時代の実例に見合うように思われる。大型建物には、北部九州と近畿でも違いがあり、近畿～東海でも細分類型が存在する。伊勢型は弥生後期の近畿北部地域の政治的社会化と無縁ではなく、その胎動、創発が野洲の地域から見え始めてきた意義も評価できる。単なる農耕集落の中心施設が見つかったわけではない。

●土器類には、弥生中期後葉～後期前葉の一定の時間幅が確認できるが、建物の消長としては短く、池上曾根遺跡や下之郷遺跡のような頻繁な建て替え痕跡は認め難い。また、（茨木市）郡遺跡・倍賀遺跡や（尼崎市）武庫庄遺跡のような布掘構造もない。伊勢遺跡にままだ存在する斜路の差し違い方向もない。（奈良県田原本町）唐古・鍵遺跡のような東日本系の樹種、柱並びとは対照的である。

●この数年、とくに湖南湖東地域の発掘調査成果は、弥生時代から古墳時代への変化を知る上に欠かせない事例が蓄積されつつあるが、このたびの大型建物検出も大成果がもたらされたと言えるだろう。

【森岡先生の連絡先電話番号】070-1774-1952

（基本的にいつでも対応可能とのことでしたが、早朝・深夜などはお控えください。）

今回、（公財）滋賀県文化財協会による野洲市中畑・古里遺跡の発掘調査で、弥生時代中期後葉の大型建物跡が検出された。その内容は、弥生時代社会を知るうえで特筆すべきものである。詳細な調査情報は、同協会から提示される内容にゆだね、ここでは重要な点を中心に記す。

1) 規模の大きさと形成時期—特殊な祭祀建物—

本例の最大のポイントは建物跡の平面規模である。現地調査した 5/13 段階の知見では、桁行 6 間（長辺）約 21.5m、梁行 1～2 間（短辺）約 6～7m の規模で、平面積は約 150 m² である。南端の柱列に棟持柱が不明確で、桁行 5 間だとしても 140 m² 規模はある。これまで見つかった類似形態（独立棟持柱系）建物の中では最大級規模である。既往の研究（山下優介 2015「弥生・古墳時代の独立棟持柱建物に関する考察」『筑波大学先史学・考古学研究』第 26 号）の研究によれば、弥生時代における類似形態の建物 119 例のうちの多く平面積 10～60 m² で、100 m² を超える規模の建物は本例以外には 4 例程度しかない。既往の検出例で 60 m² を超える建物は、弥生時代中期後半を中心としたもので、弥生後期にはこの規模のものはない。本例の帰属時期は中期後葉～末なので、大型建物が発達する時期の中でも最大級の規模と言える。

また、平面規模が大きい建物は桁行/梁行比が大きくなる（つまり縦長）傾向があるが、本例はこの指数が 3.1～3.3 にもおよび、縦長傾向が顕著である。平面規模の大きさや桁行/梁行比が何を示すかには様々な解釈ができるが、特殊な平面形態であることは間違いない。このことから、単なる倉庫や住居ではなく、集落・集落群の人々の集会や儀礼など行う役割を果たす大規模施設であった可能性は高い。この時期の社会関係の複雑化や儀礼の増大の一端を示す遺構といえよう。

2) いわゆる「伊勢型」建物の祖型—湖南地域の弥生文化の特徴—

規模だけでなく、形態も興味深い。近隣の守山市伊勢遺跡では、弥生後期の複数の建物跡がみつき特殊な祭祀空間を形成した様相が明らかになっている。ここでは、桁行柱穴が外側にむかった長い形状で、スロープ状の凹みが付帯した柱穴で構成される「伊勢型」とも言われる建物である。立柱時もしくは柱抜き取り時のため柱形状と考えられるが、すべて長軸直行方向に外側に延びることは実用以外の目的があつての形状だと推測される。中畑・古里遺跡検出建物跡もこの伊勢型の建物と全く同じ形状の柱穴で構成される。特殊

祭祀空間を形成したとされる伊勢型の建物は、これまでは弥生後期に突如現れたとも考えられていたが、本例はその祖型とも考えられる建物が湖南地域に弥生中期後葉に既に存在していたことを示す。この地域の弥生時代祭祀の特徴の継続性をうかがわせる。伊勢遺跡がこの伝統の上に形成された遺跡だと理解できる発掘例である。

ただ、本例は棟柱が建物外部に独立して配されておらず「独立棟持柱建物」とは厳密には言えない形状である。弥生時代の独立棟持柱建物は大小のものがあり、弥生時代中～後期の祭祀建物の典型形態とされて考察の対象となってきた。伊勢遺跡の建物の多くはそれにあたるが、本例はその形態が確立していない状態と理解できるかもしれない。

3) 居住地と重ならない立地－独立した祭祀施設－

本例は、規模と形態から特殊な祭祀建物である可能性は高いが、重複近接して竪穴建物や通常建物の柱穴、それに井戸や土坑などの生活遺構がみつからない。隣接した谷状地形に土器投棄があるため人的活動がみとめられるが、居住地にある建物とはいえない同時期の大規模建物には他の居住生活遺構群と重複して検出される例が多く、明確に居住区から離れている本例は特殊と言えよう。これは祭祀行為のための空間のなかにこの大型建物が建造されたとも理解できる。建物の特殊性だけでなく弥生中期の祭祀空間の在り方を考える上でも重要な例である。

4) 遺構の特筆すべき価値について

上記の3つの特質のうち1)・3)は列島規模での弥生時代の複雑化を考える上で、2)は琵琶湖沿岸部、特に湖南地域の弥生文化・社会の特性・地域性を考える上で重要である。特に、守山市伊勢遺跡が、弥生時代重要遺跡の国指定史跡として保存や史跡整備がされていることを鑑みれば、それと同等の注目度や価値を持つ遺構の発掘例と言えよう。

個人としては、本遺構は保存協議の対象としても何ら遜色のない遺構だと思う。文化庁・滋賀県・野洲市が当遺構についてどのような文化財保護の取り組みをするのか注目している。

連絡先：〒610-0394 京田辺市多々羅都谷 1-3 同志社大学歴史資料館

Tel 0774-65-7255

不在の場合は、資料館事務室から直接連絡先を伝えます。

中畑・古里遺跡の発掘調査の意義

禰宜田佳男（大阪府立弥生文化博物館 館長）

はじめに

- 近畿の弥生時代中期には、10 万㎡を超える大型環濠集落が営まれ、環濠内部には梁行 5 m、桁行 10mまでの独立棟持柱建物あるいは大型掘立柱建物（以下、「大型掘立柱建物」という）が伴う。
- 大型掘立柱建物の性格には諸説あるが、祖霊祭祀や農耕祭祀など祭祀空間であったとする見解が有力である。
- こうした環濠集落や大型掘立柱建物は、弥生時代中期末（紀元前後）に解体し、弥生後期（1 世紀）になると、集落は別のところに新しく作り変えられる。
- そうしたなか、以下、本遺跡で検出された大型掘立柱建物の意義について述べる。

1 大型掘立柱建物が発見された

- 検出された掘立柱建物は、独立棟持柱というより梁行上に浅い柱穴をもつ近接棟持柱建物とみられる。この建物も独立棟持柱建物などと同様の性格であったと考えるが、梁行 1 間（約 7.0m）、桁行 5 間（約 18.0m）で、これまで近畿で発見された大型掘立柱建物のなかでは最大級である。
- 桁行の側柱には斜路が設けられ、相当高い建物構造であったことが推測される。この種の建物は守山市の弥生後期中葉の伊勢遺跡で多数発見され「伊勢型」と呼ばれている。現状では、「伊勢型」のなかで最古の事例となり、伊勢遺跡の建物群と関係があったことを示唆する。
- 建物時期は、出土土器から弥生中期末の可能性が高い。この時期は、気候の悪化などが要因で大型掘立柱建物が衰退する時期にあたる（著名な大阪府池上曾根遺跡ではこの時期になると建物は解体している）。しかし、本遺跡で検出されたことから、弥生中期から後期という変動期、この遺跡では中期的な集落構造が維持できたことを示唆する。

2 大型掘立柱建物が単独で検出された

- この種の建物は環濠集落の内部に存在する。しかし、本遺跡では大型掘立柱建物が居住域とは異なる場所で単独で検出された。この種の建物が何らかの祭祀空間として機能していたことを示唆する。
- 伊勢遺跡では、方形区画の柵列の中に掘立柱建物群が検出され、その外側を円形にめぐる大型掘立柱建物群で構成される大規模な祭祀跡であったことが想定されている。大型掘立柱建物が居住空間から独立して存在するという点でも伊勢遺跡と共通する。

3 大型掘立柱建物は廃絶後に柱を抜き取り、「丁寧」に埋め戻していた

- 当時の遺構面からあまり削平を受けずに遺存していたからこそ判明したことだが、大型掘立柱建物が役割を終え、柱をほかの建物に転用する目的で柱を抜き取り、柱穴の埋め戻しがほぼ終わった後、最後は黄色土により柱穴の埋め戻しが終了している状況を確認した。この種の建物の埋め戻し状況が丁寧に観察された結果である。
- 黄色土を使って埋め戻しを完了させたことは、非常に「丁寧」に大型掘立柱建物を廃絶させたことが考えられる。大型掘立柱建物が祭祀空間であったことを加味すると、建物廃絶の際に何らかの儀礼行為がおこなわれていた可能性も想定されるのかも知れない。
- 大型掘立柱建物の柱穴が非常に良好な状態で発掘された例はあまりないので、この事例だけで多くを語ることは慎むべきである。しかし、大型掘立柱建物を建て替える際に儀礼を伴っていたことは想定されるべきで、今後、大型掘立柱建物の発掘調査方法に一つの観察項目に加える必要がでてきた成果でもある。

まとめ

- 本遺跡が所在する三上山周辺は、近畿式銅鐸の製作地の推定地があり、大岩山銅鐸の埋納がおこなわれるなど、弥生後期には近江南部という狭い領域ではなく、近畿の弥生社会を考える上で非常に重要な地域である。
- そのようなところから検出された弥生中期末の大型掘立柱建物の規模は近畿最大級である。この建物の存在から、高い建築技術をもつ有力者の存在が考えられる。
- 大型掘立柱建物が機能したのは、弥生中期から後期社会という社会変動が起こった時期にあたる。大阪湾岸などではこの種の建物はいったん消滅すると考えられてきたので、今回の検出は空白を埋める資料となる。
- 大型掘立柱建物のあり方は、伊勢遺跡に認められる様相（伊勢型と呼ばれる大型掘立柱建物の検出、祭祀空間が居住域と離れて存在）との共通点が認められる。伊勢遺跡で検出された祭祀空間の「起源」と評価することも可能な遺跡とみられる。その一方で、時期的に伊勢遺跡と直接つながるわけではないことも事実で、周辺で弥生後期前葉の同種の遺跡の存在が示唆されることとなった。
- 今回の発掘調査は、時期的に史跡下之郷遺跡と史跡伊勢遺跡の間に位置し、近江南部における弥生社会の動向だけでなく、近畿中部の弥生社会の動向を知ることができるという点で、考古学上においても文化財行政上においても重要な成果を挙げたと言える。